次第

よきひかりぞと影頼む仏乃御寺たづねん

ワキ詞

是ハ都方に住居仕る者にて候さても此御方をはひやくまん山姥とてかくれなき遊女にて御座候かやうに[illegible]申謂ハ山姥乃山廻りするといふ事を

こうく語りひよろみえてこそ

詞

鬼女とハ女の鬼とやよし
鬼なりとも人なりとも山に住
女ならばわらはが身の上すでに
さうふうに年ごろ色に出
いささか好ふ言の葉草の
露ほども御心にかけ給ハぬ怨

詞

山中に来りうはさを極め名を立
されバ世情萬徳乃妙花を開く事
此一曲の故ならずやしかれバ
まうし男をもとめひ舞歌
音楽乃妙音の声仏事をもなし
好りながらかつ我も輪廻を
のがれ帰性乃善所に至りなん

さくら咲と恨を山乃鳥獣も
鳴らへて辞を安く詠乃山姥り
霊鬼先こそ是見るや小衰
身を伸鬼か抓八渡乃山姥是
と成るかと鬼八ふり剣囲こ乃
山廻りかしこにかおと
身を切り苦しみを伸む為や

が先ね鬼を去らして欠け衰枕を
り鬼へ胸上見とめく
辞しなは求めて詠しや深き方滾
為やあしりきなん見えてのみ
なきしとふ乃てすし残るや
搦手をいけて甘袖え志てさき
隣へ見てもさらばゝ皆ろを待て

月は東ある小字ゑひ太夫りし
我もまた其の姿をおもかげに画し
すりやうけたる遊ふ清き衣
をなひうつなるとを急ぐ太山
也乃くだらよ心城の迄えて
此山様かひとふしきよりう
うつひ路ならぬ時かの姿なも

影しる夜乃袖つまき縫ふ薫城
すふ画しにごいのとこ秋宇毛織
りきさきれやうみ哭にくわく
鐘の音裏にしきさにざる小
味ともほえぬ鬼女ぞ云景色
いつへしとまたのきともに
暁鐘のぐ静く見渡す谷川よ

をさなの渡せんきよ水の流なる母
老迷太山の雨く　あり物
ひらの深谷遙かあり物すこ漂
深谷やな寒林よ骨狩る霊鬼
泣く前生乃業をうらむ営す林塵よ
花を供ひる天人のかう通すくも
幾生の善をよろこふや善恵

不二なるをりうし見なるまり
よろこびや万箇月前の坂景
悲しみを通うくとし家にへに
識こうわ山もさやかにはれし哀
よく見ゆるいの葉漂うち坂
悲ほわあきあまた羽ふ折り
霧のうつ通ふ多む乃以於をため

いさよふ　ツヨ上カル　村雨しや月も
ちるまきの山のけしきはわかず露さまよ
尾上の鐘かかりきえてやそ嵐
すまゝしまゝに　ミテ詞　迷ひや絶よ
出るめし雲乃葉こぼれきさし哉
志賀しの君は〳〵ぞよ那なる神
竹ひろごるよ　ツヨ　此上をおもひ出し

那のうつ実え大濃ぐ〳〵まず秋
よわの一　歌出る海雲葉ハ人なき世
ミテ詞　婆が代なをと詠乃雲を払しき
ツヨ上カル　園なこのひかりなかし衰ことし
ミテ上カル　楓おもての色も　ツヨ　さにぬ里濃
ミテ中　軒乃かりの鬼ぞのきちを
ツヨ　こよひりしめて見る哉

このり風衣かまはぬ落事り
のわ風らぬよしあしひきの
山宇りく山めくりする苦
しき おぬ うみやさしはえ
ちわひちよりおこはてあま雲
かゝる千畳乃峯海ハ苔の露より
したゝりて はとうをたゝむ

ばんすいたり 一洞空しきたに
谷乃聲こずゑに響く山ひこの
無聲音をきくたよりとなり
こゑにひゞかぬうまもり風こ
望ミしも実にやらん殊
住山家乃けしき山高うして
海近く谷深うして水とをし

下同
苦しひ海に志やうくとして
月更ぬのひかり残りし岸波よハ
中
岸松嵐吹しも風常楽乃曲を
やかは 讃り曲むかまくるて
同
ふ徳世ずるかさうはのせこ悟
ふうゆうずるかと海ハとも
云流通し 壹生証ふ流さぬも

志らぬ山中におかつのなくも
呼子鳥乃鐘けう等かわくみ
我來てとし寂山更子通なわ
下
法性崩うひえそぞ上求菩提我
歌り無明谷深きよう同ひを
下化衆生を表して万徳隊有り
をよへ ぞもくやさうなく

生所もしらず宿もなしたゞ
雲水をたよりにていたらぬ山の
おくもなししかれは人間に
あらずとてへだつる雲の身を
かへ仮に自性を変化して一念
化生の鬼女となつて目前に
来れども邪正一如と見る時は

色即是空そのまゝに仏法あれは
世法あり煩悩あれは菩提あり
仏あれは衆生あり衆生あれは
山姥もあり柳は緑花は
くれなゐの色々さて人間に
あそぶ事ある時は山賤の樵路に
通ふ花のかげやすむ重荷に

よし足引の山姥り山廻りする其
苦しきあり様山めぐり
一樹乃陰一河乃流も他生の
縁ぞかしましてや我が名
夕月の浮世をめぐる一ふしも
狂言綺語乃道すぐに讃仏乗の
因ぞかしあら御名残おしや

暇申て帰る山の春は梢に咲
かと待し花を尋ねて山廻り
秋はさやけき影を尋ねて
月見る方にと山廻り
冬はさえ行時雨乃雲の雪を
誘ひて山めぐり廻り廻りて
輪廻をはなれぬ妄執の雲の塵

たゞも積て山姥となれる鬼女が
有様見るや〱峰にかけり
谷に響て今まで爰にあるよと
みえしの山又やまに山めくり
山又やまにやま廻りして行方
もしらずなりにけり